

二松学舎大学人文学会 第一二二回大会 要旨集

大会タイムスケジュール

12..50 開会挨拶

〈研究発表〉

第一会場 於 二〇一教室

13..00 ～ 14..00 発表者① ～ ② (宋迪氏、王学勤氏)

〔10分間休憩〕

14..10 ～ 15..40 発表者③ ～ ⑤ (王弘氏、張付梅氏、林英一氏)

第二会場 於 中洲記念講堂

13..00 ～ 14..00 発表者① ～ ② (鈴置拓也氏、石高原氏)

〔10分間休憩〕

14..10 ～ 15..10 発表者③ ～ ④ (陳越氏、陳坤氏)

〈特別企画「笑いの歴史文化学」〉 於 中洲記念講堂

16..00 ～ 16..20 「江戸の寄席」 (中川桂教授)

16..20 ～ 16..50 落語『蜘蛛駕籠』 (柳亭燕三師匠)

16..50 ～ 17..00 対談「落語の世界」(中川桂教授×柳亭燕三師匠)

17..00 閉会挨拶

〈総会〉 17..10 ～ 17..40

第一会場

13 .. 00
　　┆
13 .. 13
　　┆ .. 30
宋迪「太宰治「十二月八日」―「日記」と「私」に関する考察」 五頁

13 .. 30
　　┆
14 .. 00
王学勤「芥川龍之介『疑惑』への考察」 六頁

〔10分間休憩〕

14 .. 10
　　┆
14 .. 14
　　┆ .. 40
王弘「李文権と渋沢栄一の交遊―『中国実業雑誌』と『他山百家言』をめぐって―」 七頁

14 .. 40
　　┆
15 .. 15
　　┆ .. 10
張付梅「『燕塵』にみられる服部宇之吉の一考察」 八頁

15 .. 10
　　┆
15 .. 15
　　┆ .. 40
林英一「最後の元残留日本兵―インドネシア独立戦争の陣中日誌を読み直す―」 九頁

文学研究科国文学専攻博士後期課程二年

【研究発表題目】

太宰治「十二月八日」―「日記」と「私」に関する考察

【発表要旨】

「十二月八日」では、「私」の目線を通じた登場人物の形象や戦争意識などが論じられてきた。しかし、「日記」という形式に留意するならば、「日記」を書く「私」と、そこに書かれた「私」という異なる審級を併せて解読するべきだろう。

「私」は過去の時間を組み込んで「日記」を書いている。その日の「私」を記録するという主題だけでなく、日記を書く「私」からのメタレベルのまなざしによるもう一つの主題が生まれた。つまり、「日記」を書いている「私」と、その「日記」に書かれた「私」とは、語り手と語られた登場人物のように、異なる審級でそれぞれの主題を持つ存在なのだ。

「日記」に書かれる「私」は、すでに先行研究で指摘されているように、夫の不精に悩まされている主婦である。そこには、夫への不満を抱え、夫を理解しようとする姿勢は見えない。しかし、「日記」を書く「私」には、それぞれどこか、夫を庇う意識さえ見える。

本発表は、「日記」という方法が生む特質、表象された、書く「私」の家庭への姿勢とそこに間接的に表出された戦争意識を考察する。

【研究発表題目】

芥川龍之介『疑惑』への考察

【発表要旨】

『疑惑』は芥川龍之介中期の作品である。しかし一般的には「停滞期」の作品だと思われており、芥川自身も「愚作」とよんでいる。

本発表では、結婚式の後の意味すること、八二行の省略はどのような効果をもたらすのか、中村玄道が案内も請わずに「私」の部屋へ来たことの意味すること、等の点を明らかにしたい。

特にこの発表では、倫理学者の「私」が玄道の話の「聞き手」であり、小説の「語り手」であり、読者の代わりに環境や人物を観察する視線を持っている三つの役割に注目したい。

今回の発表で小説の中の「私」と中村玄道が、全く異なる二種類の人間を代表していることを指摘したい。つまりこの二つの人間のイメージは、冒頭部分に明確なキーワード「実践倫理学」と関連している。つまり、倫理知識が掌握するが、実践の問題をうまく解決できないということと結びつく人間のイメージである。もう一つは、倫理知識がわかるが、自分の利益に直面した場合は、すぐに倫理を放棄するということと結びつく人間のイメージである。このことから、倫理学とその実践には距離があるということが表象されていることを指摘したい。

文学研究科中国学専攻博士後期課程二年

【研究発表題目】

洪沢栄一の中国認識―『中国実業雑誌』と『他山百家言』
における―

【発表要旨】

洪沢栄一の名は既に学界で広く知られており、彼に関する研究は枚挙にいとまがないほど蓄積が厚い。しかし、一九一二年に東京で発刊された中国語雑誌『中国実業雑誌』とのちに同雑誌社が編集した著作『他山百家言』にそれぞれ洪沢の一文が出ていることはまだ研究されていない。『中国実業雑誌』で洪沢は「論新中国建設之根本」という文章を発表し、財政整理、中央銀行の設立、交通政策を提言し、中華民国の社会建設に意見を出した。『他山百家言』では、「仁愛忠信以為本」という文章を投稿し、仁愛と忠信を両国関係の根本とすることを主張して、両国の実業協力を唱えた。この二つの文章は『洪沢栄一伝記資料』には納められてはいないが、洪沢の中国への認識を示している。既述の雑誌と著作の編集者は、一九〇六年に来日し、同年から東京高等商業学校で中国語教師を務めた李文権である。彼は一九一七年まで日本に滞在し、同校の商議委員を務めていた洪沢と知り合った。洪沢は日本国民外交理念の提言者であり、儒家の「忠恕の道」を中国に対処する原則にした。李文権は同じく国民外交理念を主張し、その編集活動は洪沢の関心を引き寄せた。本稿では両者の交遊とその共通理念の在り方を検討したい。

文学研究科中国学専攻博士後期課程三年

【研究発表題目】

『燕塵』にみられる服部宇之吉の一考察

【発表要旨】

京師大学堂正教習として北京で活躍した服部宇之吉（一八六七―一九三九）に関する先行研究は枚挙に暇がない。しかし、そのほとんどは、儒教理解や中国近代高等師範教育との関わりに関する先行研究であり、『燕塵』に掲載された服部に関する豊富な記事は、従来分析対象とされてこなかった。

『燕塵』は一九〇八年に在北京日本公使館を中心に日本人の交流を促進するために創刊した雑誌である。本稿ではまず、『燕塵』に掲載された「孔子略伝」「監国考」「明の烈帝」「北清事変回顧録」など十編ほどの文章をヒップアップする。これらの文章を通じて、服部氏の北清事変後に形成された中国観の過程を考察する。また、これらの文章の一部は、その後服部の体表的な著作『孔子及孔子教』にも所収されているため、両者の異同を分析したい。

次に、『燕塵』に掲載された服部の北京滞在中の学術活動について考察する。服部は清語同学会会長として、在京日本人の清語勉強を指導し、また日清両国の交流を促進するために日中両国の人が参加した乙巳会を組織した。『燕塵』所載服部の両会への具体的な関わりを通じて、今日知られていない氏が北京滞在中に果たした役割を再認識する。

第二会場

① 13
.. 00
} 13
.. 30 鈴置拓也「明治初期の東京大学における漢学観の変容―明治十六年の井上哲次郎・中村正直議論を例として」十一頁

② 13
.. 30
} 14
.. 00 石高原「清末における悲劇観の形成過程―『紅樓夢』評論」を中心に」十二頁

〔10分間休憩〕

③ 14
.. 10
} 14
.. 40 陳越「遣明使節の私貿易に関する一考察―策彦周良の『初渡集』を中心に―」十三頁

④ 14
.. 40
} 15
.. 10 陳坤「古賀侗庵の漢詩文に見る中国の君主像及び興亡論」十四頁

文学研究科中国学専攻博士後期課程 二年

【研究発表題目】

明治初期の東京大学における漢学観の変容

― 明治十六年の井上哲次郎・中村正直議論を例として

【発表要旨】

本発表では、東京大学創立より帝国大学令が布告されるまでの同大学における漢学観の変容について、江戸幕末期に漢学教育を受けて東京大学教授となった中村正直と、西洋の近代的な学問を修めた井上哲次郎との文体に関する議論を手掛かりとして考察する。

明治十年に東京大学が創立された段階では、洋学受容のための洋書翻訳能力形成に漢学は必須とされ、洋学にも精通する中村正直が文学部教員に迎えられた。彼はこの時流に則り、授業では洋書を漢文で翻訳させていた。しかし、時代が下るにつれ、漢学教育のあり方は変化し、明治十八年に法理文三学部総理加藤弘之は文学部教員に対して、西洋的学問の方法によって漢学を教授すべきだと述べた。また文体についても井上はもちろん、古典講習科卒業生市村瓊次郎も、著述は漢文ではなく「邦文」によるべきだと考えていた。

本発表で扱う議論は、あくまで漢文体にこだわる中村と、漢文体を捨てて「周到詳密」な洋文を模範とすべきだとした井上との間でなされたが、上述した東京大学における漢学の変容の中でこの議論を捉えてみると、江戸幕末期に教育を受けた者と東京大学で教育を受けた者の漢学に対する意見の相違を伺うことができる。

文学研究科中国学専攻博士後期課程三年

【研究発表題目】

清末における悲劇観の形成過程——『紅樓夢』評論——を
心に

【発表要旨】

『紅樓夢』は中国の悲劇小説として世に広く知られている。この小説をはじめて悲劇小説と指摘したのは王国維の『紅樓夢』評論である。王国維は当時の功利主義的小説観に逆らって『紅樓夢』の文学的価値を強調し、『紅樓夢』評論史ないし小説評論史において画期的な論説を残した。本稿では、元々西洋演劇の一形式であった悲劇が、どのように中国に伝わったのか、王国維は『紅樓夢』評論」にどのような悲劇観を示したのか、この二点について考察する。調査によって、「悲劇」の語が「tragedy」の翻訳として日本を介して知識人によって中国に伝わった事実が判明した。この時期は梁啓超をはじめとする清末の知識人が文学革新運動を行った時であった。そこで、小説や戯曲の評価が一変して「文学の最も上乘」な位置に占めるようになった。知識人たちは西洋と日本で提唱された悲劇の改良を中国にも導入して悲劇の創作活動を呼びかけた。王国維は、ショーペンハウアーの悲劇論を引用して『紅樓夢』の悲劇的性格を分析した。王国維の『紅樓夢』評論」に示された悲劇観は、ショーペンハウアーの哲学的理論をそのまま当てはめようとした所に無理があったが、清末の悲劇観の形成において特別の意味を持った。

文学研究科中国学専攻博士後期課程三年

【研究発表題目】

遣明使節の私貿易に関する一考察

― 策彦周良の『初渡集』を中心に ―

【発表要旨】

明代は中国史上において「万国来同」の盛況を呈した時期である。日本もこの「厚往薄来」という外交政策のもと積極的に朝貢に参加した。その実態を描く史料として、まず挙げられるのは策彦周良（一五〇一―一五七九）の『初渡集』である。

朝貢貿易に関する研究は枚挙にいとまがないが、日中両国では対象とする史料や、関心の所在も異なるため、論述の重点も異なる。また、『初渡集』中の記事に基づいた研究はいまだ不十分である。よって、本発表では、小葉田淳・田中健夫・鄭樑生らの研究を踏まえ、『初渡集』に描かれた「朝貢」と「貿易」の記事に注目し、両者の実態に基づき、嘉靖中期における日本朝貢使節団が中国に滞在していた期間の経済的待遇を考察する。

廩粮・筵宴・正賞・貿易からなる待遇に関して、策彦が最も詳述しているのは彼自身が行った取引である。朝貢貿易の三形態である進貢貿易・公貿易・私貿易の中で、彼自身が行った取引は私貿易に属し、これによって日中間を行き来したモノも少なくない。これらのモノの移動に従って、日中間において経済のみならず、文化の交流もなし遂げられた。

文学研究科中国学専攻博士後期課程三年

【研究発表題目】

古賀侗庵の漢詩文に見る中国の君主像及び興亡論

【発表要旨】

古賀侗庵（一七八八～一八四七）は幕末の博聞強識の漢学者であり、『侗庵文集』六集六十五巻及び『古心堂詩稿』十七巻という漢詩文が残っている。これらの漢詩文では、中国の王朝国家の主宰である君主たちの姿がしばしば登場しており、古賀侗庵の漢学素養およびその歴史意識をよく反映している。

中国の長い歴史のなかでは、乱世で国を一つにまとめ、新しい王朝を興した英主もあれば、治世を平庸に過ごした暗君、あるいは暴君もある。侗庵は、一口に英主と言ってもそれに伴う影もあり、暴君と言っても英邁の部分もある。漢文帝のような令主でもその細行を取ることではなく、大事績こそ注目すべきだと主張している。彼の君主論では、歴史人物の事績と才徳を王朝の興亡盛衰の交替への影響に重点をおいて評価している傾向が見える。興亡論は、中国の先秦時代から現れた伝統史観であり、侗庵が携わった昌平黌の歴史教育における史論の一大主題でもあり、中国王朝の史実から歴史の治乱盛衰の要素を検出しようという歴史認識の仕方とも言える。

本発表では、侗庵がその漢詩文において、如何に中国歴代君主の治乱の得失を評価したのかを考察して、彼の歴史意識における君道観を明らかにする。さらにその興亡論では、中国の史実から何かを読み取り日本の鑑戒としたのか、侗庵の歴史意識の性格及び時代意義についても検討する。

〈中川桂教授 プロフィール〉

一九六八年大阪府生まれ。専門は日本芸能史。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。現在、二松学舎大学文学部教授。

著書に、

『落語の黄金時代』(共著、三省堂、二〇一〇年六月)

『江戸時代落語家列伝』(新典社、二〇一四年六月)

『昭和の落語 名人列伝』(共編、淡交社、二〇一九年七月) など多数。

〈柳亭燕三師匠 プロフィール〉

一九八二年十一月十九日東京都生まれ。本名、八幡寿人。二〇〇五年三月、二松学舎大学文学部中国文学科卒業(牧角ゼミ)。卒業論文題目は、「中国笑話と江戸落語―『笑話』『学様』から落語「野晒し」への経緯」。

卒業後、二〇〇五年七月、柳亭市馬に入門。前座名は「市丸」。二〇〇九年六月二一日、二ツ目昇進、「市江」と改名。二〇二一年三月二二日、真打昇進、柳亭燕三を襲名。主な持ちネタは、『熊の皮』『しの字嫌い』。